

○1番（朝長 勇君）〔登壇〕

それでは、議長より許可をいただきましたので、1番朝長勇の一般質問を始めさせていただきます。

今回の質問は、大きく分けて3項目させていただきます。

まず、ICT教育の推進について、授業ノウハウの継承について、最後にフェイスブックホームページの活用についての3項目について、進めていきたいと思っております。

先日、2月29日に鹿児島県志布志市にあるヨコミネ式教育を実施されている伊崎田保育園を視察させていただきました。「エチカの鏡」というテレビ番組でも以前紹介されたことがありますので、御存じの方もあるかもしれませんが、非常にそこでの園児たちの様子を直接見に行きたいと思ひまして、現地まで行ってまいりました。

そこで、園児たちの様子を見まして、非常に驚かされました。保育園ですから、当然5歳以下の幼児たちなんですけれども、ピアノで歌謡曲を何曲も弾いたり、体育の時間では逆立ちしたり、10段もあるような飛び箱をどんどん飛び越えてみたり、掛け算の九九とか宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を暗唱したり、そろばんで計算問題を解いたり、本当にすごい教育がされていました。まさに読み書き、そろばん、知・徳・体の教育をきちんと実行されている、そういう場所でした。知識だけでなく、園児自身がリーダーになって団体行動をとって、大人顔負けの規律ある行動をとったりしているのを見せてもらひまして、本当に子どもの可能性といいますか、きちんと伸ばしてやれば、ああ、5歳の子どもはこんなに立派な行動をするんだということに関心させられてきました。実際、これが特別に選ばれた園児ではなくて、みんながみんなですね、そういうことをやってのけるということが本当に驚きでした。私自身は、生まれてこの方逆立ちもしたことないんですけれども、妙にそういう意味でも感動させられました。何よりですね、園児たちの表情というのが物すごく明るくて生き生きして、やらされているという感じが全くなかったというのが印象的でした。

横峯理事長の話も聞かせていただいたんですけれども、持論としておられる信念がですね、すべての子どもが天才であるという信念のもとに教育をされております。できない子どもは一人もいない、集中しない子どもも一人もいない、ただ、時間のかかる子どもがいるだけであると。だから、時間をかけてあげれば、みんなそういうことができるようになるんですよ。勉強が嫌いな子どもなんか一人もいないんですと、そういう話を聞かせていただきました。そして、子どもを育てる上で、子どもをやる気にさせるための4つのスイッチがあると。その1つ目が、子どもはみんな競争をしたがる、2つ目が、子どもはまねをしたがる、3つ目が、子どもはちょっとだけ難しいことをしたがる、そして最後に、子どもは認められたがるということですね、認めてほしいと、そういう気持ちが強いと。こういう子どもの特性というのにうまく働きかけて、その能力をどんどん引き伸ばしていくことを実践されていまし

た。子どもを育てるといふことの重要性と大人の責任、地域の責任、そういうものの重さを感じた視察でございました。そして、そのヨコミネ式の理事長の考え方に魅力を感じられて、ぜひここで子どもを育ててほしいということで、そこに通う園児たちの半数以上が市外や県外から子どもを預けて来られているということでした。

今回の質問の趣旨は、このヨコミネ式そのものというよりは、子どもの教育に効果があると認められる方法であるならば、なるべく早く取り入れて子どもを伸ばして行ってほしいと、そういう思いでさせていただきます。そして、魅力ある教育環境があって、それが広く認知されてくれば人は集まってくる。親としては、当然子どもを立派に育てたいという思いが強いですから、場合によっては引っ越してくるようなケースも十分考えられると思います。そして、それがまちの活性化にもつながっていくのではないかと、そういう思いを含めて質問をさせていただきます。

話は変わりますが、先月、2月23日に北方小学校、21日に武雄小学校を訪問させていただきました。本当はもうちょっと何か所か伺いたかったんですけども、卒業式のシーズン前ということで、ちょっと2校だけ、都合が合わずに、訪問させていただいたんですけども、どちらもやはり共通しておっしゃっていたのが、電子黒板が足りない、欲しいと。整備を急いでほしいという話を、どちらの学校でもおっしゃっていました。先生方も大分使い方になれてこられて、その実際の効果というのを先生自身が実感されてきている。具体的にはですね、黒板に字を書くときにどうしても子どもに背中を見せる時間ができるんですけども、それがなくなったことによって、子どもの集中が途切れずに、本当に授業時間中、子どもが集中を切らさずに勉強ができるということが非常にいいと。2年間ぐらい使ってみてですね、先生たちもそのよさが本当にわかってきたということでした。現状は割り当てを決めて、教室の移動とかで対応されているということだったんですけども、場合によっては時間等の関係で、使えたらいいんですけども、移動がちょっと時間がなくて、電子黒板を使わずに授業をもう済ましてしまうというようなことも実際にあるということでした。まずは最低でも各学年1台ぐらいは何とかならないかということでした。

先日、3月2日の佐賀新聞だったと思いますが、唐津市が3年計画で、小・中全校にデジタル教科書と電子黒板を導入するという記事が載っていましたが、まずは武雄市の市立小・中学校での電子黒板の導入率についてお伺いいたします。

○議長（牟田勝浩君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

いろんな思いの裏づけとして、御質問あったわけでございます。

電子黒板の整備状況でございますが、市内小・中学校合わせて68台を整備しております。学級数の43%という整備状況でございます。

○議長（牟田勝浩君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

そしたら、今後の導入計画について、まず電子黒板についてでいいですので、お聞かせ願います。

○議長（牟田勝浩君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

お話にあったように、電子黒板もいろいろございまして、多久市なんかで入れてあるのは大体これぐらいの（モニターを指す）大きさのテレビ型のような形ですが、武雄市の場合には見られた方は御存じと思いますが、一回り大きいスマートボードの名称の電子黒板を入れております。教科書をこれに出したときに、後ろから見えるというようなことを大体考えた上での整備でございます。

ただ、セットで考えますと、1 台100万円ちょっとぐらいを考えないといけません。経費的なことも考えまして、あるいはお話のように学校によってはもっと、足りないという声も当然聞こえてはおりますが、先生方になれていただく時間、研修の時間等もかなり10回近くとって、今年度対応してきております。ただ、全部の先生がすぐに使いこなせるということでもありませんので、研修しながらということ。

それから、一番はそれだけの経費がかかりますので、どれぐらいの効果を期待できるかと、そちらのほうも見ながら整備していけたらというふうに思っております。最低、階段の持ち運びがちょっと不便ですので、各フロアに1 台は欲しいなというような方向で、それができれば学年に1 台というような感じで整備ができたらなというふうに思っております。

○議長（牟田勝浩君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

そしたら、とりあえず、いつまでにどこまで導入するという計画自体は明確なものがないということでもいいですか。

○議長（牟田勝浩君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

先ほど申しましたように、いわゆる導入の効果というのをしっかり見まして、それを見た上で整備をお願いしていきたいというふうに考えております。

○議長（牟田勝浩君）

1 番朝長議員

○1番（朝長 勇君）〔登壇〕

今、教育のまず効果を見定めながらということですが、答弁があったわけですが、実際、つい先月ですね、武雄市の青陵中学校が遠隔地での中高一貫校ということで、総務省が推進するフューチャースクール事業対象校というのに選ばれていまして、既に全クラスに電子黒板、全生徒にタブレット型パソコンですか、配布をして、ちょっと先生方もまだ今からだとは思いますが、導入が始まっております。

それと、効果についてなんですけれども、独立行政法人のメディア教育開発センターが発表した、平成18年に文部科学省委託事業として、教育の情報化の推進に資する研究によるICT活用の教育効果の検証結果というのが発表されているんですけれども、これは数字で見ないといけないので、どうしてもテストの点数ということになるんですけれども、もちろん教育は点数だけじゃないとは思いますが、とりあえず数字で見える資料として、小学校の算数が5.9、小学校の社会が6.7、小学校の理科が4.7、中学、高校の数学が5.9、中学、高校の社会が10.5、中学、高校の理科が7.4ということで、実験されたのは、算数、社会、理科の3科目みたいなんですけれども、すべての科目において、明確に点数として導入効果があらわれているということでした。青陵中が実際導入されたということで、地元の武雄市の保護者の気持ちとしてもですね、青陵中学は全部そろそろととけという気持ちはどうしても今後出てくるんじゃないかなという気もしております。それで、何とか少しずつでも、1台ずつでも早目早目に導入ができないかと考えまして、これを今、（モニター使用）武雄市、どこの自治体にもふるさと納税の制度というのがあるんですけれども、今の項目としてはですね、やすらぎの長寿社会づくりとか、子どもが健やかに育つ環境づくりとか。ICT教育というのになれば、多分このBの項目にはまるのかなとは思いますが、もっと明確に項目を絞って、ICT教育の推進に使いたいからということで、そういう項目を個別に設けてクリアをしていくということができないだろうかと思うんですが、いかがでしょうか。

○議長（牟田勝浩君）

山田つながる部長

○山田つながる部長〔登壇〕

ふるさと納税制度につきましては、特化してというふうな形ですが、今のところはまだそこまでは考えておりません。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

いや、考えていますよ。要は、これちょっといいですかね。（資料を示す）これ僕の答弁資料で恐縮なんですけれども、このふるさと納税というのでね、もうむちゃくちゃ面倒くさ

いんですね、これ。申し込み用紙を武雄市に提出して、それで、2番目が銀行での口座振り込みまたは郵便局での振り込みというのがあって、入金確認があって、寄附金の受納証明書ってこうあって、これ大変ですばい。それで、しかも銀行の場合は手数料が別途発生しますので御了承くださいって。郵便局の場合はかからないみたいなんですね。しかも、これはちょっと今、日本の手続で、これはおかしいと言うつもりはないんですけれども、寄附金受納証明書を、また申告書に添付して、最終的には住民税が減額されるという仕組みになって、だから進まないんですね、これ。よくわかりました。ですので、今、被災地支援で、フェイスブック上でクレジットカードで、何というんですかね、その指定の、例えば、1万円寄附しますだったら1万円ということ打ち込んでいって、後でカードで受領をするというシステムをつくっていますので、このふるさと納税の部分についても、ちょっとこれシステム上、検討を——検討というのはしない意味じゃないんですよ、やりたいと思います。ですので、ちょっとこれ御質問ありがたかったんですけど、こんなに使い勝手が悪いというのは夢にも思わなかったんで、その中に、こんな使い勝手が悪いところにね、ICTといってもそれはちょっとおかしな話なんで、ちゃんとこのICTというのを寄附金の利用対象メニューに加えていながら、そういうクレジットカードできちんと受領が、私どもとしてはお受けするようなシステムを構築してまいりたいと、このように考えております。

○議長（牟田勝浩君）

1番朝長議員

○1番（朝長 勇君）〔登壇〕

確かに私もどがんですつとかなって、こいばきっかけにちょっと見てみたんですけども、何か面倒かねというのは感じておりました。

その納付の仕組みそのものの改善というのがどうなるかというのもあるんですけども、もしICT教育に特化した項目を設けられたとしたら、そのお金ですらね、もし電子黒板を導入しましたよとか子どもたちに伝えることができれば、子どもたちがそれに対して感謝の手紙を書いたりとか、今、特産品とかを送ったりされているということだったんですけども、もっとやっぱり武雄市を出た方というのは、そういう人のつながりというんですか、を、非常に求めていらっしゃると思うんですよ。それで、実際自分が寄附したお金が使われて、子どもが喜んで手紙を送ってくれたとか、そういうことになれば、子どもたちの教育の面でもプラスになるんじゃないかなと、郷土愛を育てるとかですね。で、実際その子どもたちが今度は大人になってそれを思い出して、じゃあ今度は自分たちが郷土のためにと、そういう気持ちも持ってくれるんじゃないかなという気もしましたもので、提案させていただきました。

実際これはちょっと私ごとになるんですけども、6月に、私、武雄高校出身なんですけれども、武雄高校の同窓会の東京支部総会というのがありまして、私も参加する予定なんで

すけれども、東京にいる同級生から、やっぱり武雄市が懐かしかと。非常に懐かしい、話ば聞きたかと。いただいたメールの言葉をそのまま言わせていただきますと、皆さん故郷に飢えておりますと。武雄市がどがんなとととやろうか、本当に聞きたかと。ということで、本当に懐かしく思う気持ちというのを、武雄市を出て、都会で働いている人たちも非常に故郷を思う気持ちを持っていただいていると。そういう気持ちに少しでもこたえていけるんじゃないかなという気がしましたので、取り上げさせていただきました。

それでは、次の質問に移ります。

次の質問はですね、授業ノウハウの継承についてということなんですけれども、ちょうど先日、北方小学校を訪問した際に、これはちょっとたまたまだったんですけれども、3年生が環境問題について学んだことを、ニコーショッピングセンターで発表するというエコキャンペーンという授業が行われていましたので、私も見学させていただきました。そのときの様子をちょっと御紹介したいと思います。（モニター使用）

ここ、ニコーショッピングセンターの店内ですね、店の中。店の人等に協力していただいて、環境問題について、三、四人のグループごとに発表会があっておりました。実際、お客さんとか保護者の方もたくさん関心を持って見に来られておりました。子どもたちがたすきかけをしていたんですけれども、「北方小学校エコキャンペーン」とですね。非常に頼もしいなと思ったのが、東日本応援団ということで、被災地の応援もしようと、そういう気持ちを持ってキャンペーンが行われておりました。これが発表の様子なんですけれども、これが節電の勉強結果ですよ。これがエコバック、これがリサイクル、これが節水ですね、これが水質についての調査、発表。で、発表とは別に、お客さんを対象にしたエコバックの作り方とか、あと子どもがつくったオリジナルのチラシというのを配布されておりました。チラシの内容というのが、これはもっとたくさんあったんですけれども、これがまちピカピカチラシですね。一番たばこの吸い殻がごみとして多かったというような、そして、まちをきれいにしましょうということで、子どもたちがお客さんに対して働きかけを行っておりました。で、子どもたちがお客さんの前で発表するというので、子どもたちも本当に生き生きして、聞く方も真剣に聞かれておりました。子どもからこういう環境問題についてのチラシとかいただくと、本当に大人のほうも、意識の向上につながっていくんじゃないかなと、本当にいい取り組みをされているなど感心させていただきました。これを見て、ほかのこういった子どもと地域をつなげていく、そういう事業というのが各学校でどういう取り組みが行われているかということをお尋ねしたいと思います。

○議長（牟田勝浩君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

各学校では総合的な学習とか生活科の授業を中心に、地域とのかかわりを持った授業を、

もう本当にたくさんなされております。武雄小学校での地域交流プロジェクト、今の御質問の例に非常に近い取り組みでございましたが、そういうものとか、あるいは御船が丘では、梅をもじって梅キングになろうというような名称での総合的な学習とかですね。朝日川クリーン作戦とか、サクラソウを育てようとか、あるいは地域とのつながり、若木小の、この前お話ししましたけれども、パンジープランターの取り組みとか、自分たちだけでなく、地域の方とのかかわり、本当に各学校でいろんな御支援をいただいて、さまざまに学習がなされております。中学校におきましても、一番各学校共通するのは、職業体験ですね。職業体験で、一番大きなかかわりをいただいているわけですが、そのほかにも縦割りでの活動とか、あるいは地域の方とUDについて学習するとか、あるいは農業体験とか、本当に紹介したい例、山ほどあるぐらいにですね、各学校で取り組んでもらっていますし、また、地域の方もしっかり応援していただいて、学習が成り立っているということを改めて感じたところです。

○議長（牟田勝浩君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

それでは、もう1つ、こういう子どもと地域をつなげる事業をやってほしいと思うのが、武雄の町内の方とちょっと話をすると、最近子どもの姿を見ないと、見る機会がない。この前、久しゅう子どもば見たばいとかなですね、そういう話をされることもあります。それで、子どもをまちに連れ出して授業をしていただくことで、そのまち自体に活性とといいますかね、そういうのが生まれてくるんじゃないかなと、そういう気もしております。

今回、紹介した環境問題に限ってではないんですけども、こういう物すごくいい授業というのは、ずっと継続してほしいなと。先生がかわっても、例えば、今回取り上げた授業に関してもですね、先生がかわったらやらなくなったというのじゃちょっと寂しいなという気がありまして、そういうノウハウを先生方同士が継承して行って、先生がかわっても本当にこれよかったねという授業はずっと続けてほしいと思うんですけども、そういう仕組みについてお伺いします。

○議長（牟田勝浩君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

各学校、年間の指導計画を持っているわけでありまして、それに基づいて、実際に指導をしているわけでございます。ですから、その中で有効な学習については、継続がなされるように、毎年毎年つけ加わったり削ったりという作業を、今、来年度に向けてしているところかと思うんですが、そういうようにして、いい学習については、今後もさらに継続するようになりたいというふうに思っております。特に子どもたちが外で表現の場を持つということは、非常に子どもたちにとっても有効な方法でありまして、ちょっと長くなりますが、き

のうの答弁の中で申しましたように、生活科とか総合的な学習が、この先ほどの例の中で、これで必要な学習を教室で鍛えて、これを行ったり来たりしながら全体を高めていくという方向だったわけですが、今、議員が不安に思われましたように、本当にこれだけのことを毎年続けられるのかという、今回の場合なんかまちづくり部環境課の皆さんの応援とか、あるいは地域の方をボランティアでお願いするとか、いわゆるコーディネートして事業を仕組むというですね、そのあたりが非常に大変な面は確かにあるわけですし、そういう面で、指導要領の変更も、うまくそういう総合的な学習を發展できなかったという反省もあるかなというふうに思っているわけですね。いずれにしても、こういうように地域の中で、子どもたちも力を高めますし、また、それが地域の皆様の元気につながるというような意味で、さらに進めていきたいというふうに思っております。

○議長（牟田勝浩君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

ありがとうございます。そういう方向で、ぜひともいいものをずっと継承して、残していくという取り組みを行っていただきたいと思います。

最後、フェイスブックホームページの活用についてに移らせていただきます。

今回の東北の大震災から1年がたったわけですけれども、きのう、震災被災地の支援については、瓦れきの受け入れの決議文を採択するに至ったわけですけれども、市民レベルでもいろんな団体やグループ、または学校でも取り組まれていると思うんです。そういう被災地の支援、息の長い支援を続けていきたい、いこうという動きがいろんなところにあると思うんですけれども、でも実際ですね、場合によっては情報が少ないとか人数が集まらないとか、何かしたいけれども何していいかわからんとか、もう少しみんなに知ってもらえんやろうとかいう、いろんな問題とか悩みを抱えているグループ、団体もいらっしゃると思います。私自身も、実際ワン・ラブ・武雄というグループに入れさせてもらっているんですけれども、そこでもやっぱりもっと協力者を募ったり、イベントの広報とかも効率的にできないかという話が出ておりました。実際、支援活動のグループ同士をつなげていったりとかですね、一般の人に有効に広報する手段ができていけば、活動が充実して、継続もしやすくなっていくのではないかと考えまして、今回、武雄市のホームページのほうで、そういう被災地支援をやっているようなグループの情報交換をするような場所を提供できないだろうかということで、ちょっと探してみたというか、私が探したんじゃないんですけれども、実際、探して見つけた人に教えていただいたんです。（モニター使用）

これが長崎市のホームページなんです。ここにホームページの角にフェイスブックのページの震災支援ネットワーク長崎というリンクが張ってあります。これを押すと、長崎市で震災支援をやっている人たちのグループの活動とかの情報が集まっているところに行くんで

すけれども、実際、これを押したらどうなるかといいますと、これがさっきの長崎市のホームページから震災支援ネットワーク長崎のボタンを押したらこうなるという画面なんです。実際、これが長崎市内のいろんな震災支援をやっているグループの活動の報告とかイベントの告知とかというのがここで紹介されていて、いろんな人が見て、ああ、これいいなと思ったら、自分でできる範囲で震災支援に加わっていくということができるような仕組みがつくられております。実際、これができたきっかけというのがですね、長崎市長と市民団体との懇談会の席でこういう話が出て、こういう形まででき上がってきたということです。

同じように、これきのうの松尾陽輔議員の質問でもある程度答える的なものが答弁されていたんですけども、ちょっと武雄市のホームページを見た感じでは、このF&B良品のリンクを張っている、ここの枠のところに震災支援をやっているようなグループの情報を提示して、情報交換できるような場所をつくれなかなという気持ちがありまして、ちょっとつくっていただけないだろうかという提案ですけども、御見解をお伺いします。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

ちょっと御質問に付随して私から、何て言うんですかね、質問と言っちゃいけないですね、何て言えばいいんですか、お尋ねしたいんですけども、実際今、フェイスブック上で、そういう長崎市にあるような被災者支援並びに被災地支援のもので、ワン・ラブ・武雄がそれを担っていただくんだったら、それはそれでいいと思うんですけども、そういう新たなフェイスブックページを立ち上げられているんでしょうか。

○議長（牟田勝浩君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

ちょっと内容の確認ですけど、ワン・ラブ・武雄でということでしょうか。

〔市長「はい」〕

結局、とにかくリンクを張るだけの状態になっているかということですかね。

○議長（牟田勝浩君）

いいえ、市長はそういうふうなのを既にもう立ち上げられていますかということですから、それに基づいてちょっと答弁してみて。樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

議長さん、ありがとうございます。私がちょっと補足的にお伺いしたいのは、リンクを張るというのは、物理的には私並びにフェイスブック係がオーケーということであれば、それは載せられますけれども、それで私が伺いたいのは、それは議員さんは今のワン・ラブ・武雄を想定されているのか、それかワン・ラブ・武雄以外でそのような被災者支援、被災地支

援のフェイスブックページを想定されているのか、まずお尋ねしたいという趣旨でお聞きしている次第です。

○議長（牟田勝浩君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

まず、今想定しているのはですね、長崎市の事例があったということもあるんですけども、ワン・ラブ・武雄をここに繋げるというんじゃなくて、いろんな団体からこういう情報があるので上げてくださいという受け付けをして、それをいろんな団体からの連絡を情報として並べていくようなページというんですかね。

○議長（牟田勝浩君）

掲示板……。

○1 番（朝長 勇君）（続）

例えば、ある学校でこういう被災地支援のイベントをやりますのでとか、そのイベントの紹介とか、各団体の情報を束ねるということですね、簡単に言うと。

○議長（牟田勝浩君）

朝長議員、イベント掲示板みたいなことということでお伺いしてよろしでしょうか。

（発言する者あり）ちょっと違う。樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

まず、長崎市役所、私も山田秘書官からレクチャーを受けましたけれども、長崎市役所のフェイスブックページがどうなっているかという、長崎市役所のお気に入りのところですよ、左のところにお気に入りのところに震災支援ネットワークのフェイスブックページがあるということなんです。ですので、長崎市役所のフェイスブックページに入られた方は、横の左のところ、幾つか並んでいますけれども、そこの震災支援のネットワークに入っていくという流れになっているんですね。武雄市の場合は、先ほど御指摘がありましたけれども、F & B 良品とかチーム武雄loveとか、あるいは、あとフェイスブックジャパンでしたっけ、がこうあったりとか、お気に入りというのはすごい限られてるんですよ。ですので、先ほど答弁したとおり、そこのお気に入りのところにね、いろんな震災支援ネットワークのフェイスブックページを載せるということについては、私は前向きに考えたいというふうに思っています。もちろんこれフェイスブック係とも調整はしますけれども、ただ、私が何度もお伺いしているのは、それがワン・ラブ・武雄じゃないわけですよ。そうすると、そういうページというのは、つくられることなのか、もしくはちょっと質問を変えますけれども、それを市につくれとおっしゃっているのか、あるいはもう1つ、これ最後にします。もう1つはそういった、例えば学校とかでいろんなイベントをやるといったのをウォールに載せてほしい趣旨なのか、そこをちょっと明らかにしていただければ、答弁がスムーズに行くかとい

うふうに思います。

○議長（牟田勝浩君）

朝長議員、よろしいでしょうか。1番朝長議員

○1番（朝長 勇君）〔登壇〕

手順として言えば、それぞれの団体が武雄市にこういう活動をしますから紹介してくださいという情報を上げて、受付は行政のほうです。で、その内容によって、やっぱり何でもかんでもというわけにはいかないと思いますので、これやったらみんなに広報していい、広報すべきだという情報を選別して、やるのは市の職員ということになると思います。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

それは今でも実はやっているんですよ。例えば、民間の方々からでもね、市民の方々からもうこういう、例えば、催し物をするとか、こういうイベントをするといったときは、例えば、市報であったりとか、あるいは市のフェイスブックページに入れてほしいというのは今でもやっておりますし、幸いにして今までの、例えば、フェイスブックだけで言うと、アクセス数が月5万だったのが、今、月間ベースで330万になっているわけですよ。ですので、そういった発信力が格段に強化されていますので、載せてほしいというのは結構参ります。それに私たちとすれば、積極的に載せるようには実はしております。で、ぜひお願いがあるのは、それよりもね、朝長議員さんが中心となって、そういう震災支援のネットワークのフェイスブックを立ち上げてほしいんですよ。そうしないと、やっぱり何でもかんでもになっちゃうんですよ、市の場合はね。例えば、子どもの、何ていうんですかね、集まりがあったりとか、あるいは例えばですよ、老人会があったりとかというふうにして、かえって、朝長議員さんが何をしたいか。今の質問の流れでいくと、例えば、被災者支援並びに被災地支援を行いたいということであれば、朝長議員さんがそのフェイスブックをつくって、そこで、何ていうんですかね、いろんな人たちの意見を寄せていって、これを私たちがお気に入りのページに載せるというふうにしたほうが、恐らく二度手間、三度手間じゃなくて、そこだったらダイレクトに行きますし、これは手前みそになりますけれども、今、私どものページにね、お気に入りで載せてくれというのは結構、もう世界じゅうから来ています。そりゃ、だって月330万人ですから。開設以降、1,600万人の方々が見られていますから。ですので、そういう意味で言うと、被災地支援というのは、武雄市は本当に本腰を入れてね、武雄市議会もきのう2人の反対にかかわらず決議を示していただいたこともあって、本当にオール武雄としてしていますので、そういう意味で言うと、ぜひ主体的にそういったページをつくっていただくと。それが、ワン・ラブ・武雄のフェイスブックページで、僕いいと思うんですよ。いいと思いますし、長崎市も多分そうなっているんですよ。これ市の職員がやっているとい

う痕跡が見えないんですよ、僕さっきずっと見ていましたけれども。

そういうことで、ぜひ議員さんの特段のリーダーシップをぜひお願いをしたいと、このように思います。

○議長（牟田勝浩君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

そしたら、私もそういうグループの人たちと、そういう動きができないかということを検討してみたいと思います、ちょっと相談してですね。私もちょっとアナログ的なところがあるので。

関連して、あと残りの質問としては、テーマごとにそういうリンクを張って、つくって、青少年への育成とか、そういう子どもを守る活動とかのページとかをずっとつくって、みんながやっぱり青少年育成の問題とかでも、どうしても学校の先生とか保護者とか警察とか、当事者に閉じた動きになりがちというんですかね、武中の力とか、いろんな地域でやろうという動きがあっているんですけども、そういうのをもっと広げるのにも使っていけないかなという提案をするつもりでいましたけれども、それもやはり、今の流れからいくとですね、つくって、まず自分たちで動いてみてからやるべきなのかなと思いました。

どちらにしても、ちょっと私自身もフェイスブック自体、何カ月か刺激を受けて、本当に便利だなと、おもしろいなと、人の輪がどんどん広がって行ってですね、本当に可能性が広がるというのを感じております。それで、実際、人口比率だけからいうと、使っていない人が大多数かとは思いますが、そういうフェイスブックを使った活動というのをどんどん広げていくことによって、フェイスブックを使っていない人もその有益性というのに気づいていただけるのではないかなという気もしております。私も今、そういうふうで勉強しながら活用法を探っていきたいと思います。

今回の質問はこれで終わらせていただきます。

○議長（牟田勝浩君）

以上で1 番朝長議員の質問を終了させていただきます。